

# 心理社会的ストレスの性差について

## — 性役割の観点から —

筑波大学大学院(博)心理学研究科 金 愛慶

筑波大学心理学系 小川 俊樹

Gender differences in the psycho-social stressor from a sex role perspective

Aekyoung Kim and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The present study examines gender differences in the psycho-social stressor from a sex role perspective. Undergraduate students (male=82, female=97) assessed themselves on the Japanese Bem Sex Role Inventory and the Psycho-Social Stressor Scale. Male's Psycho-Social Stressor Scale consists of 5 factors: social and interpersonal strain, social expectation of traditional masculine roles, psychological and financial independence, responsibility for parents, and inability of self-assertion. Female's Psycho-Social Stressor Scale consists of 4 factors: underestimation of female's social activity, social expectation of traditional feminine roles, sexual mischief, and handicap of physical and social-roles. For males, factor 1 (social and interpersonal strain) negatively correlates with femininity. For females, Factor 2 (social expectation of traditional feminine roles) negatively correlates with femininity. In addition, factor 3 (sexual mischief) positively correlates with masculinity in females. These findings suggest that the cognitive evaluation of the psycho-social stressor is associated with sex role orientation.

**Key words:** psycho-social stressor, gender difference, sex role.

### 問題と目的

本研究は大学生の男・女特有の心理社会的ストレスを調べることによって性役割同一性の確立における大学生の心理的葛藤を検討すると共に、個人がすでに志向している性役割特性と男・女特有の心理社会的ストレスとの関連を検討する。

青年期は自己の形成によって非常に重要な時期であり、当然男性もしくは女性としての自分のあり方の確立もその重要な発達課題の一つである。その中で、青年は性役割に対する期待に沿った行動を取るようになる(性役割の獲得)だけでなく、望ましい性役割像の認知および性役割に関する価値観の形成(性役割観の形成)する。伊藤・秋津(1983)は中学生、

高校生、大学生および成人を対象とし、周囲から期待される性役割の認知の発達的变化を検討した。ここでは次のようなことが明らかにされた。①すでに中学生の段階で成人と同様の性役割ステレオタイプが獲得されており、学年が進むにつれ、役割期待を性に型づけされた(sex typing)方向に認知するようになる。②男子は年齢の上昇と共に男性性の価値を高め、女性性を常に低く位置づけている。これに対し、女子では女性性の価値を高めるのは高校までで、高校を境に男性性への価値への移行が生じる。また、これまでの男性および女性の能力、性質、態度などについての評価に関する研究では男性優位の評価が明らかにされている(McKee & Sherriff, 1957; 間宮, 1959; 伊藤, 1978)。女性役割に比べ男性役割

により高い価値が付与されているこれらの結果と伊藤・秋津(1983)の結果から、青年期後期にあたる大学の時期は、青年期前期のような受動的な性役割の獲得とは異なり、一人の成熟し独立した男性・女性としての役割観をより能動的に形成するなかでさまざまな葛藤に直面する時期であること、さらに性役割観の形成のパターンは男女によって異なることが想定される。

そこで本研究では、男性であるために、もしくは女性であるために感じると報告されるさまざまなストレスの中に男女大学生の性役割同一性の確立の問題が反映されていると想定し、男女大学生の性に特有の心理社会的ストレスを調べることによって男女大学生の性役割同一性の確立における心理的葛藤の性差を検討することを第1の目的とした。

現在ストレスと呼ばれている現象はSelye (1956)によって唱えられた概念である。Cannon (1939)のホメオスタシス・モデルに影響を受けたSelye (1956)は、ある有害な刺激(noxious stimulus)によって生体のホメオスタシスに歪みもしくは乱れが生じるという考え方から、その刺激をストレス(stressor)、それに対する生体の一連の生理的、心理的な反応をストレス(stress)と定義した。さらに本研究では、他者との相互作用の中で発生するさまざまなストレスフルな事柄を心理社会的ストレスと定義し、焦点を当てる。

カフェイン、騒音など直接的に生理的ストレス反応を生じさせる化学的、物理的なストレスとは対照的に心理社会的ストレスは個人の価値観やコミットメントによってストレスフルか否かの解釈が異なってくる(Lazarus & Folkman, 1984)。また、Silvern & Ryan (1983)は、自己評価の重要な側面を占める性役割は自分の理想像と関係しており、自分の女性的な面を高く記述する人は人生における対人関係的な面を重要視することを明らかにした。このことから、ストレスの個人的意味と個人が志向した性役割特性との関連性が示唆される。性役割特性とは男・女それぞれの生物学的性に対して社会から期待されるステレオタイプ化された二つの行動的特性クラスターである。男性により多く期待される性役割特性である男性性(masculinity)は課題達成志向の道具的・活動的特性(instrumental-agentic traits)を、女性により多く期待される性役割特性である女性性(femininity)は円満な対人関係志向の情動表現的・コミュニケーション的な特性(Emotional expressiveness-communicational traits)を意味している(Spence, 1983; 伊藤, 1986)。したがって、男性および女性特有の心理的ストレスに対する個人の

解釈もすでに志向している性役割特性の度合いによって違ってくるのが考えられる。そこで本研究では、男性性・女性性に関する既存の定義に基づき、性役割特性と男女別の特有の心理的ストレスの認知との関連を検討することを第2の目的とした。

## 方法

**調査対象** 4年制大学に在学中の大学生179名(男子82名, 女子97名)。

**調査時期** 1994年6月下旬から7月上旬にわたって実施された。

### 質問紙

#### 1. 心理社会的ストレスの項目の作成

4年制大学の男性12名, 女子34名に男性特有, 女性特有の生活ストレスをそれぞれ自由記述させた。得られた生活ストレスの中から2回以上の頻度を示す項目は、男性が38項目, 女子が40項目であった。そして、心理学専攻の大学院生3名に内容が非常に類似した項目と性別特有の生理学的ストレスの項目を削除するように求めた。3名のうち2名が一致した項目を削除した結果、男性特有の生活ストレスには23項目が、女性特有の生活ストレスには23項目が残り、男女それぞれの心理社会的ストレス尺度(Psycho-Social Stressor Scale; 以下 PSSS とする)を構成した。そして、男女別に PSSS のそれぞれの項目に対して「もし、そのような出来事が生じた時、「大変さ・つらさ・しんどさ・不愉快さ」などをどの程度感じるか」を「全く感じない(1)」から「非常に強く感じる(5)」までの5段階で評定を求めた。

#### 2. 性役割特性の測定

安達・上地・浅川(1985)によって作成された日本版 BSRI (Bem Sex Role Inventory)の男性性尺度と女性性尺度、それぞれ20項目を用いた。そして、各項目に対して「全く当てはまらない(0)」から「非常に当てはまる(6)」までの7段階により評定を求めた。

**手続き** 質問紙は授業時間中に一斉に実施し、男女それぞれ自分の性に該当する PSSS と日本版 BSRI に回答してもらった。

## 結果と考察

### 性別特有心理社会的ストレスの内容の検討

男子用 PSSS と女子用 PSSS のそれぞれの内容を検討するために、男女それぞれの PSSS の23項目について因子分析を行った。初期解を主成分法で求めたところ、男子用 PSSS、女性用 PSSS とともに固有

値1以上の因子として8因子が得られた。次に、スクリー法により因子数を求めた結果、男子用 PSSS には5因子、女性用 PSSS には4因子が抽出され、バリマックス回転を行った。そして、因子負荷量が.40に満たない項目といずれの因子にも同程度の因子負荷量を示す項目を除外し、最終的に項目を選定した。

1. 男子特有の心理社会的ストレス

男子用 PSSS には、第1因子は5項目、第2因子は5項目、第3因子は4項目、第4因子は2項目、第5因子は4項目が得られた。男子用 PSSS の項目

内容および回転後の因子負荷行列を Table 1 に示す。第1因子の項目をみると、“6. 授業で当てられたり、みんなの前で発表すること”、“12. リーダーシップを取らされること”、“8. 集団の中で自分一人が男であること”、“22. 年下に馬鹿にされること”、“23. 見知らぬ人と二人きりになること(エレベーターなどで)”という主に公衆の前での緊張や恥ずかしさを意味する項目の因子負荷量が高い。したがって、第1因子を“社会的・対人的緊張(social and interpersonal strain)”の因子と命名した。第2因子では、“11. 無理にお酒を飲まされること”、“13.

Table 1 Factor Loadings of Male's Psycho-Social Stressor Scale

	I	II	III	IV	V	$h^2$
Social and Interpersonal Strain						
6. 授業で当てられたり、みんなの前で発表すること	.77	-.16	.00	.15	.11	.66
12. リーダーシップを取らされること	.76	.14	-.03	-.03	.06	.61
8. 集団の中で、自分一人が男(女)であること	.76	.05	.07	.13	.00	.60
23. 年下に馬鹿にされること	.51	.26	.19	-.18	.06	.40
23. 見知らぬ人と二人きりになること(エレベーターなどで)	.44	.30	.10	.25	-.10	.37
15. 勇敢さを求められること	.37	.35	.30	.12	.25	.43
Social Expectation of Traditional Masculine Roles						
11. 無理にお酒を飲まされること	.04	.74	-.11	.07	.12	.59
13. ちょっとしたことでもセクハラと言われること	.05	.58	.08	.45	-.30	.65
10. 異性に馬鹿にされること	.43	.56	-.01	-.14	.13	.53
5. 力が弱くて、重い荷物を運べないこと	.02	.45	.05	.31	.21	.35
21. 相手をリードしなければならないこと	.16	.41	.03	.09	.23	.26
14. デートの時お金を払えないこと	.35	.36	.19	.28	-.23	.42
Psychological and Financial Independence						
17. 恋人がいないこと	.24	.01	.75	-.16	.18	.68
16. 異性に積極的に話しかけられないこと	.25	.26	.67	.09	.04	.59
20. 親から経済的に独立していないこと	-.12	-.30	.56	.08	-.04	.43
19. スポーツなど、勝負で負けること	-.10	.40	.51	-.18	-.27	.54
Responsibility for Parents						
3. 親の面倒を見ること	-.04	.03	-.10	.77	.09	.62
7. 家を継ぐこと	.17	.15	-.00	.76	.10	.63
Inability of Self-assertion						
1. 頼まれたことを断れないこと	-.05	.14	.03	.05	.62	.42
2. 意見を聞かれたとき、笑ってごまかせないこと	.22	.10	-.38	.07	.62	.59
4. 目上の方が異性を優遇すること	.13	-.01	.42	.22	.52	.51
18. 人に自分のペースを乱されること	-.06	.48	.20	-.11	.52	.55
9. 親の期待やプレッシャーがあること	.33	-.02	.28	.41	.42	.54
Eigenvalue	4.75	2.08	1.84	1.69	1.59	
Total Variance (%)	20.70	9.00	8.00	7.40	6.90	

ちょっとしたことでもセクハラといわれること”，“10. 異性に馬鹿にされること”，“5. 力がなくて、重いものを運べないこと”，“21. 相手をリードしなければならないこと”などの項目で因子負荷量が高かった。これらの項目からいわゆる伝統的な男らしさを期待されたり、その役割をうまく果たせないことがストレス源になっていると考えられる。したがって、第2因子を“伝統的な男らしさの社会的期待 (social expectation for traditional masculine roles)”と命名した。第3因子は，“17. 恋人がいないこと”，“16. 異性に積極的に話しかけられないこと”，“20. 親から経済的に独立していないこと”，“19. スポーツなど、勝負で負けること”という項目の因子負荷量が高く、一人前の男性としての自立性が問われていると考えられる。したがって、第3因子は“精神的・経済的自立 (psychological and financial independence)”と命名された。第4因子は，“5. 親の面倒をみること”，“15. 家を継ぐこと”という項目の因子負荷量が高いことから，“親に対する責任 (responsibility for parents)”と命名した。第5因子は，“1. 頼まれたことを断れないこと”，“2. 意見を聞かされたとき、笑ってごまかせないこと”，“4. 目上の人が異性を優遇すること”，“18. 人に自分のペースが乱されること”など他者に自分の意思を表明出来ないことをその内容とする項目の因子負荷量が高いことから，“自己主張のできなさ (inability of self-assertion)”と命名した。

社会的・対人的緊張、伝統的な男らしさの社会的期待、精神的・経済的自立、親に対する責任感、自己主張のできなさといった以上の5因子をふまえてみれば、今日の男子大学生にとってストレスフルであることは親からの分離・独立といった青年期の発達の課題、そしてこの発達課題に付随する男性としての役割葛藤がその主なるテーマであると考えられる。加藤(1980)は、青年期は自己の自立を求めて模索する時期であり、この時期が自己の発見とか自我の目覚めの時代といわれるのは自立した生き方を求める自己を中心とした新たな自己に気づき、これを見つめ育てようとするのに関係すると述べている。そして、青年が自己に関心を向けるようになれば、当然自己が他者からどう見られているかという他人の評価が気になり、それゆえ公衆の前とか対人場面で緊張や不安が高まることになる。こういった文脈の中で社会的・対人的緊張が男子の心理社会的ストレスの一つの因子としてまとまってきたのではないかと考えられる。

## 2. 女子特有の心理社会的ストレス

女子用 PSSS について、男子用 PSSS と同様の手

続きにより4因子を抽出した。第1因子は5項目、第2因子は7項目、第3因子は5項目、第4因子は4項目が得られた。女子用 PSSS の項目内容および回転後の因子負荷行列を Table 2 に示す。第1因子の項目をみると，“13. 一生懸命働かなくてもいいと言われること”，“2. お茶汲みをすること”，“11. 早く結婚したほうがいいと言われること”，“14. ヒステリックであると言われること”，“4. 就職や仕事での差別があること”などがあげられる。これらは、主に女性の社会活動に対する一般的評価が低いことをあらわしていると考えられる。したがって、第1因子を“女性の社会活動に対する低い評価 (underestimation of female's social activity)”の因子と命名した。第2因子は，“3. 自分の容姿が人にどう見られるか気になること”，“20. 何を着るか迷うこと”，“17. 服装について人に何か言われること”，“1. 家事いっさいをこなすこと”，“5. 料理の腕が問われること”，“9. きちんとした身なりをすること”，“16. 学歴は必要でないと言われること”など、主に伝統的な女性像に対する社会的な期待をその内容とする項目の因子負荷量が高いことから，“伝統的な女らしさの社会的期待 (social expectation of traditional feminine roles)”と命名した。第3因子は，“15. 性犯罪に関するニュースや噂を耳にすること”，“18. 酔っぱらいにからまれること”，“7. いたずら電話がかかってくること”，“6. 性的な冗談を耳にすること”，“12. ヌード写真が氾濫すること”など、主に性的ないたずらや性的商品化などをその内容とする項目の因子負荷量が高いことから，“性的ないやがらせ (sexual mischief)”と命名した。第4因子は，“22. 体力のないこと”，“21. 夜一人歩き出来ないこと”，“23. 結婚や家庭による制約があること”，“8. 疲れていても掃除をしなくてはいけないこと”など、主に女性の体力および役割上のハンディをその内容とする項目の因子負荷量が高いことから，“身体・役割上のハンディ (handicap of physical strength and social role)”と命名した。

以上の4因子をふまえて女子のストレスを考えてみると、女子の場合も男子と同じく、伝統的な女らしさの社会的期待という第2因子の女性としての自己像の確立などの発達の課題の問題も含まれているが、女子の心理社会的ストレスとして最も著しい特徴は、第1因子の女性の社会活動に対する低い評価、第3因子の性的ないやがらせ、第4因子の身体・役割上のハンディという“女性の社会的な立場の弱さ”がその主な内容である。女性の社会活動に対する低い評価という第1因子からも推測できる

Table 2 Factor Loadings of Female's Psycho-Social Stressor Scale

	I	II	III	IV	$h^2$
Underestimation of Female's Social Activity					
13. 一生懸命働かなくてもいいと言われること	.74	-.06	.10	-.04	.56
2. お茶汲みをすること	.71	-.12	-.03	.31	.61
11. 早く結婚したほうがいいと言われること	.56	.06	.21	.12	.38
14. ヒステリックであると言われること	.53	.26	.08	-.01	.35
4. 就職や仕事での差別があること	.46	.13	.10	.38	.38
10. 一人旅が禁止されること	.43	-.02	-.22	.39	.39
Social Expectation of Traditional Feminine Roles					
3. 自分の容姿が人にどう見られているか気になること	.10	.75	-.12	.04	.58
20. 何を着るか迷うこと	-.16	.71	.01	.10	.53
17. 服装について人に何か言われること	.28	.68	.23	-.27	.67
1. 家事いっさいをこなすこと	-.07	.52	-.00	.09	.28
5. 料理の腕が問われること	.25	.40	-.16	.18	.28
9. きちんとした身なりをすること	-.02	.40	.16	.21	.23
16. 学歴は必要でないと言われること	.15	.40	.14	.17	.23
Sexual Mischief					
15. 性犯罪に関するニュースや噂を耳にすること	-.11	-.06	.72	.33	.64
18. 酔っぱらいにからまれること	.15	.03	.71	.13	.55
7. いたずら電話がかかってくること	.21	-.02	.68	-.10	.52
6. 性的な冗談を耳にすること	.46	.10	.59	.02	.56
12. ヌード写真が氾濫すること	-.09	.21	.55	.25	.42
Handicap of Physical and Social-roles					
22. 体力がないこと	-.04	.07	.02	.70	.49
21. 夜一人歩きできないこと	.18	.07	.25	.65	.52
23. 結婚や家庭による制約があること	.19	.10	.05	.56	.36
8. 疲れていても掃除をしなくてはいけないこと	.09	.23	.17	.43	.28
19. 異性の友人とのつきあいで相手が誤解しないように気をつけなければならないこと	.06	.31	.25	.39	.32
Eigenvalue	4.39	2.19	1.90	1.64	
Total Variance (%)	19.10	9.50	8.30	7.10	

ように女性のパーソナリティに対する偏見や女性の社会進出に対する期待や評価の低いことが今の女子大学生にとっては最も特有なストレスであることが示唆される。これは昨今の就職難という社会的背景の影響も無視できないが、特に女子大学生がそれに敏感に反応していることが考えられる。

男女大学生における性に特有の心理社会的ストレスラーの内容を検討した以上の結果から、男子の場合は自立した男性になるという発達の課題にまつわるストレスが主なる内容であった。これに対して、女子の場合は社会的、身体的な立場の弱さに対

するストレスが認められ、社会から求められている性役割観の受け入れにおける葛藤や混乱が示唆された。

#### PSSSの各因子と性役割特性との関係

PSSSの各因子と性役割特性との関連を検討するために、男女別々にPSSSの因子得点と男性性得点、女性性得点との間にピアソンの積率相関係数を求めた。その結果はTable 3に示す。

男子では、“社会的・対人的緊張”という第1因子と女性性との間に中程度の有意な負の相関が見ら

Table 3 Correlation Coefficients between Psycho-social Stress and Sex Role Orientation in Male and Female

	Masculinity	Femininity
Male		
Factor 1 Social and Interpersonal Strain	-.13	-.52**
Factor 2 Social Expectation of Traditional Masculine Role	.15	.13
Factor 3 Psychological and Financial Independence	.17	.03
Factor 4 Responsibility for Parents	.04	-.02
Factor 5 Incapability of Self-assertion	.16	.05
Female		
Factor 1 Underestimation of Female's Social Activity	-.15	.07
Factor 2 Social Expectation of Traditional Feminine Role	.17	-.27**
Factor 3 Sexual Mischief	.24*	-.02
Factor 4 Handicap of Physical and Social-roles	-.01	.03

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , two-tailed.

れた( $r = -.52$ ,  $p < .01$ ). すなわち, 男子であっても他者との情動表現的・コミュニケーション希求的な特性である女性性を多く志向しているほど対人的・社会的なコミュニケーションのスキルを多く身につけていることになり, それゆえ社会的・対人的緊張を少なく感じているということが考えられる。

女子では, “伝統的な女らしさの社会的期待” という第2 因子と女性性との間に弱いながら有意な負の相関が見られた( $r = -.27$ ,  $p < .01$ ). つまり, 自らの女性性を高く認知している人ほど自分の生物学的性と自分の学習した役割や価値観が一致しているために他者から女性らしさが求められたときの葛藤が少なく, それゆえストレスを少なく感じるのではないかと考えられる。また, “性的ないやがらせ” という第3 因子と男性性との間には弱いながら有意な正の相関が見られ( $r = .24$ ,  $p < .05$ ), 課題達成志向の道具的・活動的特性を意味する男性性が強い人ほど, 性的ないやがらせを受けることや性の商品化に対するストレスを強く感じるという結果が得られた。女性の高学歴化や社会進出の増加とともに発生したウーマンリブやフェミニズム運動などからもうかがえるように, 男性性の強い女子ほど女性の人権が損なわれる性的ないやがらせに不快感を感じるということが考えられる。

独立した成人になることに対する不安や葛藤などの発達上の課題を主に報告する男子の結果とは対照的に, 女子の場合は身体的な弱さ, 社会的な立場の弱さなどのストレスが主な内容であったこと, またそれらの心理的ストレスに対するストレスの認

知にはその個人の性役割オリエンテーションが関係しているという結果から, 今後は女子に焦点を当てて, 性役割における葛藤とストレスの認知およびメンタルヘルスとの関連を検討する必要があると思われる。

## 要 約

本研究は, 性役割の観点から心理社会的ストレスの性差を大学生を対象として検討するものであった。心理社会的ストレス尺度と日本版 Bem Sex Role Inventory が男子82名, 女子97名の大学生に実施された。因子分析によって心理社会的ストレスの内容を検討した結果, 男子では社会的・対人的緊張, 伝統的な男らしさの社会的期待, 精神的・経済的自立, 親に対する責任, 自己主張のできなさという5 因子が得られた。女子では, 女性の社会活動に対する低い評価, 伝統的な女らしさの社会的期待, 性的ないやがらせ, 身体・役割上のハンディという4 因子が得られた。そして, 男女の心理社会的ストレスの各因子と性役割オリエンテーションとの関連を検討した結果, 男子の場合は社会的・対人的緊張という第1 因子と女性性との間に中程度の有意な負の相関があった。女子では, 伝統的な女らしさの社会的期待という第2 因子と女性性との間に有意な弱い負の相関が, 性的ないやがらせという第3 因子と男性性との間には有意な弱い正の相関があった。これらの結果から, 心理社会的ストレスに対する認知的評価は性役割オリエン

テーションとも関係していることが示唆された。

### 引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 1985 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究(1)－日本版BSRI作成の試み－ 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 484-485.
- Cannon, W. B. 1939 *The wisdom of body*. New York: W. W. Norton & Comp. INC.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 伊藤裕子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 146-151.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造－性役割測定尺度(ISRS)作成の試み－ 教育心理学研究, **34**, 168-174.
- 加藤隆勝 1980 自己の発見－青年期 サイコロジー, 第1巻, 第1号 サイエンス社

- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Spinger.
- 間宮 武 1959 性差研究(第2報告) 教育心理学研究, **6**, 205-216.
- McKee, J. P. & Sherriffs, A. C. 1957 The differential evaluation of male and female. *Journal of Personality*, **25**, 356-371.
- Selye, H. 1956 杉靖三朗ほか(訳) 1974 現代生活とストレス 法政大学出版局 (Selye, H. 1956 *The stress of life*. New York: McGraw-Hill.)
- Silvern, L. E., & Ryan, V. L. 1983 A reexamination of masculine and feminine sex-role ideals and conflicts among ideals for the man, woman, and person. *Sex Roles*, **9**, 1223-1248.
- Spence, J. T. 1983 Comment on Lubinski, Tellegen, and Butcher's "masculinity, femininity, and androgyny viewed as distinct concepts." *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 440-446.

—1995. 9. 30受稿—